

平成24年2月16日（木）東部研究会

舘 隆志 先生（駒澤大学仏教学部非常勤講師）

「園城寺公胤について」

園城寺とは、天智天皇の勅願と伝えられる天台宗寺門派（現天台寺門宗）の寺院である。

中世を通して、四箇大寺（東大寺・興福寺・延暦寺・園城寺）の一つとして、国家的法会の中心寺院の一つであった。この園城寺の名が歴史上に登場するのは円珍の再興後であるが、その後、比叡山（山門）と園城寺（寺門）に分裂し、抗争を繰り返して行くのである。その過程を追いながら、その実態を歴史的な史料に基づいて明らかにする。その上で、法然上人や道元禪師との関係が指摘される園城寺公胤について考察してみたい。

これまでは、園城寺僧侶の公胤は、法然上人伝や道元禪師伝に断片的に語られる内容によって理解されているのが研究の実態であった。そこで、日記等を中心とした当時の史料に記された公胤の記事を200以上收拾し、それらの記事を詳細に考察することによって、公胤の行実を明らかにするものである（『園城寺公胤の研究』2010年、春秋社）。

「公胤と法然」

当時の史料によって明らかになった園城寺公胤の行実を踏まえて、伝記史料（古伝）や絵伝に記された法然上人と公胤の関係について考察する。

まず、『高山寺聖教目録』や『長西録』に基づいて、公胤が『選択集』の反論書として『浄土決疑抄』三巻を撰述したことが史実であることを指摘した。この関係性を踏まえた上で、法然上人と公胤の関係を記した記事について、一つ一つ史料に基づいて丁寧に検証した。

公胤は法然上人の門弟となったということは広く知られた通説である。しかし、一方で『行状絵図』に「門弟と称するに似たり」とあるように、後世にそのように認識したというのが中世の史料に記された姿であって、門弟という姿は『善導寺本』や『琳阿本』にしから記されていない。古伝に記された内容からは、むしろ公胤はその時代の理解者として認識されていたと考えるのが相応しいように思われる。